

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	堀田 明
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) Literarische Modernität und Formbewusstsein in der deutschsprachigen Erzählliteratur zu Beginn des 20. Jahrhunderts (20世紀初頭ドイツ語圏の文学作品における文学の近代性と形式意識)			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	フェーダーマイヤー、レオポルト	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	小林 英起子	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	後藤 弘志	
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授	裕 智樹	
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授	原 千史 (福山大学)	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、近代におけるドイツ語圏の物語文学、特に古い物語形式から小説への変遷、20世紀初頭におけるモデルネ概念について論じている。初期のゲオルク・ルカーチの小説理論に着目し、古典文学を重視するが新しい文学を十分評価できなかったこの文学理論を、ヴァルター・ベンヤミンやテオドル・アドルノの議論を援用し、後者二人が文学モデルネの潮流をとらえ直し、更新したことを検証している。</p> <p>ルカーチの理論は「全体性」把握の必要性を主張するが、アドルノの理論では「全体性」は現代文学では崩壊・喪失しているにとらえており、堀田はこの点に現代文学の一部に表れる「断片的なもの」を見ている。</p> <p>論文は、序論、それぞれ6～8節からなる第I章～第IV章、結論、参考文献で構成される。</p> <p>第I章ではアドルノの講演「哲学のアクチュアリティ」について論じ、アドルノの結論を文学に適用している。現代文学と現代思想は収斂しているとする。</p> <p>第II章ではまずアドルノの講演「自然史への理念」を考察対象とする。この中でアドルノはベンヤミンの著作『ドイツ悲劇の根源』から引用しており、後者からの強い文学的、精神科学的影響を指摘する。堀田はさらにベンヤミンが独自の断片理論を提示している悲劇の著書を、次に彼の初期ロマン主義の文学理論について考察する。アドルノは第2回の講演でルカーチに遡る「第二の自然」という概念を導入しているとして、堀田はこの連関において「疎外」という概念の重要性を指摘する。</p> <p>第III章では、典型的な近代の物語テキストを分析し、「疎外」という概念を、周囲と敵対的な関係をとる現代の英雄のあり様と関係づける。この章では、19世紀前半におけるゲオルク・ビュヒナーの断片小説『レンツ』を選び、論じている。ビュヒナーは、ゲーテと同時代に実在した作家ヤーコブ・ミヒャエル・ラインホルト・レンツに関する資料を用いて作品を書いた。この断片小説からも現代的な傾向が見て取れる。堀田は『レンツ』をドイツ現代文学の鍵となるテキスト、世紀転換期(1900年頃)のモデルネの先駆けであるとする。作品の主人公は、ルカーチが『小説の理論』で明確に表現した小説の主人公の原型に対応するものであると結論づける。</p>			

第IV章では、ベンヤミンの論文『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』を取り上げる。その中では、もはや直接的に表象することができない「全体性」と個人との関係が問題となる。その際、ロマン派が定義したような「断片」の概念や、イロニーの概念も表れる。現代の物語文学は内省的、自己反省的で、この内省性には終わりが無いとする、自らフィヒテに関係づけるベンヤミンを堀田は支持する。ベンヤミンは小説という形式はイロニー抜きでも、無限を有限の形で表現できるとする。堀田はまさに小説がこれを試みているという。

結論では、上記4つの章における考察が簡潔に整理されている。小説という形式は、近代における全体性、概念の変遷と揺れを具現していると強調する。

本論文の問題提起には高い独創性がある。本論では二次文献をあまり多く引用していないが、論文を読むと膨大な読書のあとが分かる。非常に体系的に、常に重要なことを見据えて研究がなされている。他の理論を、参照するのみならず、自己の分析を理論的に根拠づけるために習得している。その際、堀田独自の新しい概念も生み出し、注意深く定義している。

本論文では重要な概念の理論的な仕上げがなされ、具体的で非常に精密なテキスト分析に成功している。現代文学におけるエッセーの手法など残された課題はまだあるが、今後なお発展の余地がある独創的な論文であると評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)